

# トレンド

炎が揺らめく暖炉を前に家族だんらんのひとときを。1人1台はスマートフォンを持つ時代。テレビの前に家族が集う風景が消えつつある中、代役として暖炉の注目が高まっている。最近では、設置工事が不要で環境負荷の小さい「バイオエタノール暖炉」、暖炉型ファンヒーターなども登場。都市部のマンションでも気軽に安らぎを感じられるとあって、世代を超えて人気が広がっている。

「温かみがあったいいわね。リビングが落ち着ける場所になりそう。東京都品川区にある住宅展示場。3人の子供を持つ30代女性は暖炉を前に笑顔で話す。

大和ハウス工業は同展示場に「森の家」というコンセプトのモデルハウスを置く。鳥の鳴き声が流れ、観葉植物に囲まれた空間のど真ん中に鎮座するのが暖炉だ。「暖炉に興味を持って訪れる人は増えている」(大和ハウス東京本店住宅事業部の船橋政宣氏)という。

三井ホームが2018年4月に発表した、天然木をふんだんに取り込んだコンセプトハウス「ラングレー」。ここでもリビングの中央に暖炉が据え付けられている。

## 都会で暖炉 心もぽかぽか



三井ホームの暖炉があるコンセプトハウス。工事など不要なバイオエタノール暖炉がブームの火付け役。

### だんらんの場、世代超え注目

三井ホーム商品開発部の竹田文聡チーフマネジャーは「人は根源的に自然に対して癒やしを感じる。木だけでなく火も自然の重要な要素。訪問客のおもてなしを重視する顧客に好評だ」と語る。同社は東京都杉並区のほか長野県や大阪府でもモデルハウスを展開。20年には新たに鹿児島県にも設置する計画だ。

欧米では2〜3年前、デンマーク語の「ヒュッゲ(Hygge)」という概念がブームになった。ヒュッゲとは「穏やかで温かく居心地のいい空間・時間」を意味し、その象徴として暖炉を囲んで家族や友人らとだんらんを楽しむ風習も広がった。

日本でも北欧ブームの

### 設置工事不要、変わり種も

流れから暖炉が徐々に認知されるようになった。加えて台風や水害、地震などの災害対策としても脚光を浴びつつある。「電気やガスなどのインフラが打撃を受けても、まきをくべるだけで暖をとる、料理もできる」(日本暖炉ストロブ協会の兼業理事)からだ。

一方、一般的に排気のための配管や煙突を設けるなど大がかりな工事が必要になるため、家に暖炉を置くハードルは高い。まき集めのほか、すす取りなど定期的なメンテナンスも必要になる。そんなデメリットを覆したのが、簡単に設置できるバイオエタノール暖炉だ。

「仕事に疲れた時に暖炉の炎を眺めていると心が落ち着き、穏やかな気持ちになる。買って良かった。必要になるため、家に暖炉を置くハードルは高い。まき集めのほか、すす取りなど定期的なメンテナンスも必要になる。そんなデメリットを覆したのが、簡単に設置できるバイオエタノール暖炉だ。」



ニトリの暖炉型ファンヒーターの販売コーナー

持ちになる。買って良かったです。東京都大田区の一戸建てに住む30代の男性社員が購入したのは「エコスマートファイヤー」。トウモロコシやサトウキビから作るバイオマスが燃料で、インターネットで簡単に購入できる。2歳の子供がいるが、「耐熱ガラスが使われているのでやけどをする心配がない」という。

エコスマートファイヤーの価格帯は10万〜110万円。決して安くはないが、エコスマートファイヤーの日本の代理店によると、売上高と販売台数は年20%増で成長しており、今年は3000台近くを売り上げる見通しだ。

ニトリ赤羽店(東京都北)には暖炉型ファンヒーターを集めたコーナーがある。本物と見まがう炎が揺らめくが、発光ダイオード(LED)の光で模しているだけで、熱風は電気で起こしている。近くに住む男性社員(65)は「知人の家に暖炉があり、うらやましく思っていたが、火の始末が心配だった。これなら安心して使えそうだ」と話す。

ヒュッゲは北欧発の概念だが、かつては日本でも家族の真ん中に囲炉裏の火があった。家庭内で炎の揺らめきを感じられる暖炉がブームになるのも必定なのかもしれない。(井原敏宏)